

私の工夫

豊かなかわり合いの中で、
考えを深める授業をめざして

岡山市立津島小学校

教諭 岩尾 友恵



1 はじめに

岡山大学教職大学院で学ばせていただいた二年間、ゼミの先生のもとで探究し続けたのは、議論を通して様々な視点や側面から自己の生き方を考える問題解決的な学びの在り方（道徳科）についてである。授業観を揺さぶられるとともに、今まで大切にしてきたことも再認識できた。

授業改善で教師に求められる力は「課題解決に向けて議論していく学びのプロセスを構想する力」である。そして、子どもの発言をよく聴き、つなぎ、位置づけるなど議論をコーディネートすることが教師の役割となる。本稿では、その考えを基盤とした実践を紹介したい。



話し合いレベル1
話す人のほうを見て聴く

2 日々の取組の工夫

(1) 対話が生まれる教室にするために

安心感や居場所感を生むために「待つ」「聴く」ことを常に大切に行っている。具体的には、視線を合わせて聴くことや、考えながら話す子どもをせかさず待つこと、黙って考えていることも認めること

と等を心がけている。また、聴きたいと思う話し方、話したいと思いう聴き方について定めた「話し合いレベル」を子どもたちと決め、うなずき、あいづち、同意の拍手等が自然に生まれるようにしている。

(2) 発達段階をふまえた対話の姿を描いて

発達段階ごとに、めざす対話の姿の表を作成した。作成においては、セルマンの社会的視点取得理論をもとに、子どもの姿を描くことにした。さらに対話をもとに考えを深めることをねらう支援として、思考を見える化するツールを活用するようにしている。

(3) 議論し、課題解決に向かう学びのプロセスを構想して

一時間の授業プロセスは、課題意識からの学習課題設定↓教材理解↓課題発見↓課題解決をめざす議論↓解決の妥当性の振り返り↓自己の振り返り（自己課題への適用）である。（渡邊満「論説 道徳授業力とは何か」『道徳教育』6月号 明治図書2018）課題追求のプロセスを意識することで、自己の生き方について考えを深めるといふ道徳科の目標にせまりやすく、自分とのかかわりでの価値の深まりや多面的・多角的な見方

への発展をとらえた評価の見取りがしやすい。

3 2年生での道徳授業の実践

「ぐみの木と小鳥」

※ぐみの木の実を病気のりすに届けることになった小鳥。ある日嵐となるが、ぐみの木の制止を振り切って小鳥はりすのもとへ向かう。

(1) 課題意識を生かすめあてづくりの工夫

まず、取り組んできた「親切の花を咲かせよう」プロジェクトを振り返り、親切にされて嬉しかったことに目を向ける。次に「親切レベルチェックメーター」を活用し、今まで自分がした親切は喜んでもらえていたかを問い、課題意識がもてるようにした。その上で教材を活用し話し合うことで「喜んでもらえる親切ができるには、どんな心が大切なのだろう」というめあてをみんなで共有し、主体的な学びになるようにした。

(2) 議論（対話）による課題解決の工夫

心情円で気持ちを表し、「行く（赤）」「行かない（青）」の立場をネームプレートで明示して話し合った。こうすることで、発言をつなぎやすくし、議論による解決を進められるようにした。子どもは

T やみそうにない嵐の音を聞きながら小鳥はどんなことを考えているでしょう。
 C リすさんの病気がこの嵐でもっと悪くなるから行ってあげよう。グミの実を食べたら元気になるよ。
 C また来るねと約束したし。きっと待っている。
 C でも自分が行ったら風邪をひくかもしれない。けがするかもよ。
 T 青が多い人は同じ理由？(うなずき多) 友達ではないし、そこまでしなくてもいいんじゃない。
 C 友達じゃなくても行く。だって、りすさんがひとりぼっちで、おなかすいてかわいそうだよ。
 C それに、行かなかったら、グミの木さんだってりすさんが心配で落ち込むと思う。
 C 本当は行ってあげたいよ。(うなずき多) だけど、もし怪我したり病気になるって誰が実を届けるの？その方が、迷惑をかけちゃうよ。親切ができなくなるのが怖い。(うなずき多) (T…行くことは、喜んでもらえる親切にならないかもってこと?)
 T では、みんなの考えを振り返ってみよう。これは思いやりの気持ち？これはグミの木さんやりすさんが聞いたら納得してくれる？これは喜んでくれるかな？(板書に納得カードをはりながら)



立場を明確にする自己内対話

主人公以外の視点に目を向けたり、他価値との葛藤を、理由を考えながら主人公になりきって語ったりした。行動を支えている理由が、相手への思いやりの気持ちであり、喜んでもらえる親切の形かどうか

中心発問のプロトコル(発話記録)

話し合いの途中で心情円を動かしたり、終盤にネームプレートを動かしたりする子どもには、その理由を問い、考えの変容を見取った。そして、めあてにもどり、大切にしたい心について問うと「困っている人の気持ちを考える」「友達ではないけれども誰にでも」等の発言

(3) 解決の妥当性の振り返りの工夫



創造性対話をめざして

を話し合いの論点とした。プロトコルに示したように、議論の中で、多面的多角的な見方をしていく子どもの姿が見られた。

C 骨折しているお友達が連絡バックにお手紙が入れられなかったからしてあげたよ。
 C (隣の席の児童) うれしかったよ。
 C (おうちの人からの手紙を読むと) 思いがけないところでしてたわあ。
 C 弟がテレビを見たい時、Eテレにして向きを変えてあげた。
 C 横断歩道のボタンを押してあげたり、出かける時みんなが出るまでドアを開けて待ったり、病院の待合で小さい子におもちゃを譲ってあげたり(振り返りワークシートより)
 C 親切をたくさんしてみんなを喜ばせたいな。
 C 小鳥さんみたいに相手に何かあったら心配してあげる心を持ちたい。
 C 友達じゃなくてもみんなに親切ができるといいな。

自己の振り返りプロトコル

今後も、豊かなかかわり合いにより、考えを深める授業ができるように「考え、議論する」学びのプロセスを構想する力を磨いていきたい。

自己の振り返りでは「喜んでもらえる親切ができたことはあるか」と問うだけでは十分ではない。書き溜めたカードの記述を見たり、保護者からの手紙を読んだりすることで、全員が自己を見つめ、振

(4) 自己の振り返り(自己課題への適用)の工夫

があった。選択した行為は自分にとって、相手にとって、周りにとってどうか等、多様な視点で考えた発言もあった。自分事として考え、安全の視点から行かない選択もあることをみんなで納得し、思いやりの気持ちに応じた自分ができる親切の形(第3の方法)を考えようと、解決の方向を共有したことが主体的な学びが継続できた一因だと考える。

4 おわりに

道徳科の授業は、自分たちの力で、よりよい生き方の考えを創ろうという意識で学習に臨ませたい。その時、主人公の事例をいつも正しいものとして扱い、一つの価値観に導くのではなく、他者との豊かなかかわり合いによる議論によって、価値の多様性に触れることを大切にしたい。納得した道徳的価値は、時にルールとして学級という社会に根付き、道徳的実践力につながるっていく。



おうちの人の手紙から自己の振り返り

り返ることができるよう支援した。